

澤へ來り、伊崎所左衛門親とよしみ有之由にて便り居り、御家を望むといへども、時節不到。同町の澤田五郎左衛門親預り鐵炮足輕の小頭に欠人有之、是へなりとも召抱候事に示談有之處、毛利庄兵衛の美少年に懇慕し、云々の次第にて召捕へられ、泉野にて牛裂に仰付られ候處、腸をつかんで投げ出したるなど云ひ傳へたり。但し一説に、鶴間豐藏とも云ふ。鶴間谷と云ふは、豐藏此の所にて牛裂に成りたる坂なり共云ふとあり。今按ずるに、右は元和八年の事にて、菅家見聞集 國事昌披問答等に、澤田次左衛門組持筒足輕柳原文藏、衆道之事に依つて、泉野に於て牛裂の刑に處せらる。とあり。然れば鶴間谷に於て刑法に處せられしといふ説は、全く傳聞の誤り也。懷惠夜話には、三段崎孫市に飼置の草履取乙助と云ふ者執心せし由露顯し、中立ちせし者共縮を命ぜられ、乙助方へも捕手向ひたる由承り、其の儘逃去り、小立野牛坂の高へ上り跡を振り返り見けるに、追手の者共坂下まで參りたるを見捨て、經王寺へ欠込み、佛壇の下に隠れ、山越えして越前まで立退きけるに、微妙公御怒強く、中立ちしたる者共、牛裂に仰付けらる。と載せた

り。此の傳説に據れば、彼の乙助なる者此の坂路より逃げる事よりして、牛裂の刑に處せられたるも鶴間谷なりと聞き傳へ誤りけるにや。但し懷惠夜話の傳説も全く請けがたし。皆後人の過聞あるなるべし。

○鶴間谷 清水

此の清水は、坂路の半腹にありて、甚だ冷水なり。或は云ふ。此の清泉は東向にて、山腹八歩目より涌き出づる水なる故に、殊に靈水也。山腹の八歩目より涌き出づる清水は、當國にて此の清水のみなり。又此の地は東向にて旭のさし込む地なるにより、昔は朝日清水と呼べり。然るに中頃此の靈水の邊に朝日觀音の石像を安置す。故に世人此の清水をば朝日清水と呼べり。眼病等の者、此の水にて洗へば甚だ功驗ありといへり。又此の靈泉は如何なる故にや、若し惡黨など此の清泉の井筒へ小便を仕かけ、或は不淨の品を入るれば、即時に水出で止みける也。此の下流は坂下なる民家の飲水用になせし故に、自然出で止む事あれば、又例の子供共があしき事をなせるならんと、井筒を清め掃除をなすに、頓て元の如く靈水涌き出づる事、實に神泉ともいふべ

し。又此の靈水甚だしき冷泉なるが故に、上石引町の酒店能登屋の名酒旭鶴といへるは、此の靈水を以て醸造せり。故に此の泉坪に石の井筒を仕込みたるも、もとは彼の酒店よりなりたるなりといへり。

○鶴間谷の小貝

靈泉の流下に、ちぐら貝或はびんろうじなどいへる小貝あり。此の小貝を取り來て、産後の滞りに服すれば、必ず即功ありといひ傳へたり。故に世人折々此の地に來り拾ひ往きけり。中にもちぐら貝は、殊に効能ありといへども、甚だ稀にして得難し。びんろうじは多かりし故に、多分は此の貝を取り行くとぞ。

○鶴間谷石地藏

北國巡杖記に云ふ。鶴舞谷の地藏薩埵は、古行基菩薩醫王山をひらき、七堂伽藍のいとなみありて、其の満願に此の像をきざませ給ふ。今にいちじるしき靈驗をたれ、衆願をめぐみ給へるとかや。今按ずるに、右行基の作也といひ傳ふる地藏尊は、今鶴間谷の坂下より、田井新町の町端の方へ行く間なる、往來脇の岡上にある石地藏是なりと云ふ。

石像なりといへども、甚だ古作なりと見ゆ。但し里俗の傳説までにて、行基が作などいふ事は、外の記録にも所見なく、普門禪師の地藏驗記などにも記載せず。

○みうらや路

北國巡杖記に云ふ。金城下の東北にあたりて、鶴舞谷といへるあり。淺野川の水上にして鈴見村といへる里の上に山あり。きさらぎ末より彌生のはじめ、春草わづかに萌え出でたる頃、鶴舞谷に臨みて遠く見たすに、あざやかにみうらやと假名文字のやうにあらはる。されば年毎に天作にして、かゝるをかしき一興なれば、貴賤酒肴を携へ遊参しあひぬ。彌生の半になりぬれば、はや草々伸びたちて失せぬ。是よりしてみうらや路と申しあへり。

きれ^(巾)みうらや路になぐれ行く 北 莖
ルウフル^(子)にみうらや路^(人)と呼ばん 關 更

右の道路は、鶴間谷の坂下なる田園より彼の坂道を眺望するに、つゞら折なる坂道の道筋、未だ草葉の萌え出でされば、おのづからみうらやの假名文字の如く見ゆるなりと。遊人共の何となくいひ出でたるより起りたる雅名にて、俳